

東洋史学

◇教員◇

教 授 佐川英治、吉澤誠一郎、守川知子

准教授 島田竜登

助 教 上出徳太郎

◇学生◇

学部 26名 修士課程 6名 博士課程 18名

東洋史学(アジア史)のおもしろさ、それはアジア社会がもつヴァイタリティー、それと表裏の急激な社会変化、そして今後の世界を変えていく可能性にある。

アジアの魅力は、アジア社会に一步でも足を踏み込んだ経験をもつ者であれば直ぐに感ずるであろう。喧噪と雑然さと色彩と匂いのあふれる街路、水と光と草原と雪と陽射しの極限から極限までのスペクトル、伝統と現代との整理のつかない混雑・・・そのいずれもが、人をアジア社会に引き寄せ、好奇心を煽り、不安感を増幅させ、そして知的冒険心をかき立てる。

東洋史学が対象とするこのようなアジア社会は、落ち着き安定したヨーロッパ社会とは異質なものである。したがって、その社会へのアプローチも、定まったものがあるわけではない。後に個別に紹介するように、佐川英治教授は中国古代文明とその東アジアへの影響について調査や研究を行っている。吉澤誠一郎教授は、近代中国を世界史のなかに位置付けることをめざし、都市や国際関係など多方面からの接近を試みている。また、島田竜登准教授はインドのスーラトや東南アジアのジャカルタなど、かつての国際貿易都市を調査し、南・東南アジアと世界がどのように結び付いていたのかを考察する。守川知子教授は、西アジアや中央アジアの聖者廟や墓地を中心に、宗教と社会の関係を捉え直そうとする。これらのフィールドに、スタッフはしばしば足を運び、場合によっては学生を引き連れて行く。まずアジア社会の中に入り、体験を積み、アジアを見る目を養っていくという方法の重要性を、東洋史学専修課程が認識しているからである。

もちろん、東京大学東洋史学専修課程が研究対象としているのは、激しい変化の中にあるアジアの現代だけではない。そこには、「史記の世界」から「コーランの世界」にいたるまでの多様な文明世界の、古代から現代にいたる歴史が含まれている。東アジア文明の担い手となった中国・朝鮮、いくつもの騎馬民族国家が興亡した中

中央アジア、仏教・ヒンドゥー・イスラーム文化が入り組む南アジア・東南アジア、そして古代オリエン特文明とイスラーム文明が交錯する西アジア、さらに地中海・イスラーム文明と緊密な交渉を保ってきた北アフリカ・イベリア半島……。これらの地域は、約5,000年にわたる長い歴史を持ち、膨大な人口と広大な領域を有している。この地域に生きる人々の生活と文化を知ることなしには、世界を理解することはできないはずである。

近代以降の歴史学は、「西洋」＝ヨーロッパを中心にして歴史の理論を組み立て、世界史の展開を理解しようとしてきた。実際、上述の多様な地域を「オリエント」ないし「東方」として一括しようとする発想自体、ヨーロッパ社会の自己認識と表裏をなす西洋起源の考え方である。その意味では、「東洋史学」という枠組みは自明のものではない。「ヨーロッパの眼」でアジアの歴史を見ることは、単にヨーロッパのアジア観を歪めてきただけでなく、アジアのアジア観を歪めてきた。そうした見方に、大きな疑問を突きつけてきているのが近年非常に盛んになってきたグローバル・ヒストリーの潮流であるが、同じく東洋史学専修課程もそうした見方に安住していない。

では、どのような方法と態度がアジア研究、とりわけ東洋史学研究に必要なのだろうか。そこには、安心して頼れるような確立した「東洋史学研究の方法」があるわけではない。先に紹介したように、フィールドワークをはじめ、それぞれの研究者がそれぞれの方法を模索しており、そこに東洋史の面白さがあるともいえよう。

ただし、東京大学東洋史学専修課程には、長年の伝統が築きあげてきた幾つかの重要な特色がある。第一は、**方法的・理論的関心の強さ**である。本研究室の歴代の教員は、さまざまな隣接学問分野の成果を積極的に吸収し、自らの方法と視角を明示し、相互の批判をも含めて、学界の論争のなかで重要な一翼を担ってきた。したがって、本専修課程に進学する学生にも、方法や理論への強い関心をもつことが要求されるであろう。第二は、「**史料を正確に、厳密に読む**」という**実証的研究態度**である。先人の研究に安易によりかからず、史料や対象と直接に接しつつ研究方法の妥当性を常に吟味してゆくという態度が不可欠だと考えている。したがって、史料を正確に読むために、中国語、朝鮮語、ベトナム語やインドネシア語などの東南アジア諸語、ヒンディー語、タミル語などの南アジア諸語、アラビア語やペルシア語、トルコ語などの西アジア、中央アジア諸語などを習得することが推奨される。ヨーロッパ人の旅行記・伝記・報告書などや既存の研究を批判的に利用するために、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語などの読解力も必要であろう。もちろん、文学部にはこれらの言語を習得する授業が設けられている。したがって、各人の興味にしたがって必要な言語を学ぶことができる。第三は、**研究対象にタブーを設けていない**という点である。歴史学にはふさわしくないと勝手に思いこまれてきた、例

えば絵画、服飾、音楽、食のようなテーマであっても、それを対象として選ぶことを妨げることはなく、むしろ新しいテーマに積極的に挑む学生をおおいに歓迎する。もちろん、「人と物と思想の東西交流」やアフリカやオセアニアの歴史も東洋史の研究対象となる。また、現スタッフでは対応できない場合には、そのテーマにふさわしい研究者を紹介できる力量とつながりを東洋史学専修課程は有している。

東洋史学専修課程では、**卒業論文の作成**が重視される。それは、学生生活に全力を傾けて一つのテーマを追究した知的経験が、その後の人生に必要であり、また役立つと信ずるからである。東洋史学専修課程の教育の目的は、必ずしも、東洋史に関する広い知識を集積することのみにあるのではない。むしろ、歴史的情報にじかに接して自分のものの見方を自力で練り上げてゆく、そうした知的態度、知的誠実さを身につけることが重要であると考え。他人から与えられた器をそのまま使うのではなく、自分で鉱石を掘り出し、自分の工夫した方法で精錬し、鑄造していこう。その結果できた器が、たとえ先人のものと似たりよったりであっても、あるいは先人のそれより不格好であっても、その体験はきっと貴重な感動を与えてくれるにちがいないし、東洋史学専修課程は、そうした態度を高く評価する。

東洋史で卒業論文を書くのは難しいと思うかもしれない。しかし、卒業論文の評価の基準は単純である。自分で生の史料、情報に接し、既存の研究を批判的に検討することによって自分の頭で考え、そこから得られた観察を明晰な言葉で論理的にまとめているかどうか、という点が問われるだけである。真摯に取り組めば、必ず評価されるし、評価されてきた。また、進学時には進学生全員と先輩、教員が参加する研修旅行があり、卒論相談会も随時開催され、そうした学生の悩みに応える機会が設定されている。さらに、東洋史学専修課程のホームページでは、論文作成のためのマニュアルも提供している (<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/~toyoshi/>)。

東洋史学専修課程の卒業生は、毎年三分の一前後が大学院へ進学するが、他の多くは企業に就職している。就職先は、大手の製造業、金融、商社、出版、マスコミなど、多様である。公務員を目指す者も少なくない。

大学院では、「アジア史」専門分野として、アジアからさらには世界全体を見渡しようとするような専門家の育成を目指す教育が行われている。

次に、**各教員について紹介**しておこう。スタッフは、中国史2名、南・東南アジア史1名、西・中央アジア史1名であるが、他に、韓国朝鮮文化研究室から1名が学部授業を兼担し、加えて毎年、学内外から数名の講師を招き、アジア全域をカバーしている。いずれも、それぞれ独自の領域で、既存の枠組にとらわれない歴史像を描き出そうとしてきた専門家ばかりである。東洋史学専修課程進学を志す学生諸君には、このような教員の研究の積み重ねと現在の興味とがにじみ出た講義や

演習から何かをつかみ取ってもらいたい。

各教員の研究の内容を西から順に紹介する。

守川知子 教授は、前近代および近代の西アジア史・中央アジア史、特にイラクやイランのシーア派聖地への巡礼や、ペルシア語の歴史叙述・学術史、アルメニア人などの宗教マイノリティ、文化交流といった社会史や文化史を専門としている。イスラームに限定されない西アジアの多様な宗教・言語環境に関心を持ち、近年では、近世期の旅行記や回想録といった一人称の叙述史料を用いた研究を行っている。主著に、『シーア派聖地参詣の研究』（京都大学学術出版会、2007年）、編著に『移動と交流の近世アジア史』（北海道大学出版会、2016年）、『都市からひもとく西アジア—歴史・社会・文化』（勉誠出版、2021年）、共編著に*Vestiges of the Razavi Shrine, Āthār al-Razavīya: a Catalogue of Endowments and Deeds to the Shrine of Imam Riza in Mashhad* (Tokyo: The Toyo Bunko, 2017)がある。

島田竜登 准教授は南アジア史・東南アジア史を担当している。16世紀から20世紀前半の経済史・貿易史が専門であり、とくにオランダ東インド会社文書などオランダ語史料を駆使して南アジア史や東南アジア史、さらには日本から東アフリカに至る海域アジアの諸相を明らかにし、そのアジア史的、世界史的位置付けを試みている。近年では、バタヴィア（現ジャカルタ）やアユタヤなどのかつての国際貿易都市における異文化交流の歴史にも関心がある。著書としては、*The Intra-Asian Trade in Japanese Copper by the Dutch East India Company during the Eighteenth Century* (Leiden and Boston: Brill Academic Publishers, 2006)がある。また、『アジア経済史研究入門』（共編、名古屋大学出版会、2015年）、『歴史に刻印されたメガシティ』（共編、東京大学出版会、2016年）、『グローバル経済史』（共著、放送大学教育振興会、2018年）、『1683年 近世世界の変容』（編著、山川出版社、2018年）、『1789年 自由を求める時代』（編著、山川出版社、2018年）などもある。さらに、歴史学の方法にも関心を寄せており、「歴史学はすでに「国境」をこえつつある—グローバル・ヒストリーと近代史研究のための覚書—」（『パブリック・ヒストリー』8、2011年）といった業績もある。くわえて、放送大学客員准教授として、「グローバル経済史」というテレビ講義を2024年度まで担当した。

佐川英治 教授は、中国古代史を専門とする。秦漢統一国家の成立から隋唐世界帝国が誕生するまでの中国と東アジアの歴史に関心をもつ。近年は、漢代の軍事制度、古代の碑文習慣、『三国志』の研究、北魏史、東アジアの都城の設計、東部ユーラシアの歴史などに取り組んでいる。主著に『中国古代都城の設計と思想』（勉誠出版、2016年）、『378年 失われた古代帝国の秩序』（共著、山川出版社、2018年）、『ビジュアル大図鑑 中国の歴史』（監修、東京書籍、2022年）、『君主号と歴史世界』（編著、山川出版社、2023年）、『ユーラシアのなかの中国史』（共著、放送大学教育振興

会、2026年)がある。

吉澤誠一郎 教授は、清代史・中国近現代史を担当している。主な研究領域は19世紀から20世紀前半の中国政治史、社会史、経済史、思想史であるが、とくに近代都市社会の形成を民衆運動、ナショナリズムなどの問題と関連づけながら描き出している。最近では、19世紀のアジア史を全体として鳥瞰する歴史叙述の方式、中国における近代歴史学の形成と日本との関係などについても研究を進めている。主著として、『天津の近代—清末都市における政治文化と社会統合』（名古屋大学出版会、2002年）、『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国をみる』（岩波書店、2003年）、『清朝と近代世界』（岩波新書、2010年）、『愛国とボイコット—近代中国の地域的文脈と対日関係』（名古屋大学出版会、2021年）がある。

東洋史学専修課程に進学しようとする学生諸君は、これらのスタッフによる講義や演習、先輩や同級生との討論などを通じ、歴史学には様々な方法があり、様々なものの見方があるのだ、ということに実感をもって気付いてほしい。対象地域を深く研究することは、同時に、自分のものの見方を確立してゆく過程でもある。多様な視角、多様な方法、相互の対話を楽しみつつ、新鮮な感覚とたくましい意欲をもって、自分の個性的なアプローチを追求することを期待したい。

また、学部時代は、受け身の学習から抜け出し、研究上で自らの問題を見つけ出すとともに、これからの長い人生についての重要な選択を迫られる大切な時期でもある。コーチ役・助言者としての教員、先輩、同級生の集まる研究室での交流は、互いに大きな刺激をもたらすであろう。研究室には、アジア各地からの留学生も少なくない。本郷への進学後は、積極的に研究室に顔を出し、新しい学生生活の拠点としてほしい。



香港特別行政区 南丫島の天后廟
(2024年3月吉澤誠一郎教授撮影)



スウェーデン東インド会社の元の建物・ヨーテボリ市
(2011年7月吉澤誠一郎教授撮影)